

令和3年度 初等中等教育監修 国際交流講師採用選考会

2021-2022 International Exchange Programme
for Primary and Secondary School Teachers Programme Report



Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財團法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託 令和3年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
2021-2022 International Coordination Programme for Education in a New Age entrusted by the Ministry of Education,
Culture, Sports, Science and Technology of Japan (MEXT)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。本事業は、ユネスコや国際連合大学(UNU)の事業として実施され、2018 年度からは文部科学省の事業として引き継がれ、20 年間以上途切れることなく続いてきました。本事業における日本のパートナー国は、2001 年から韓国、2002 年から中国、2015 年からタイ、2016 年からはインドが加わり、現在 4ヶ国と連携、東アジアから東南アジア、南アジアに交流国を広げています。開始当初より 2022 年現在までに、海外教職員は 4ヶ国合わせて 4,200 人以上、日本教職員は 1,100 人以上が海を渡り、教

育現場が舞台の国際交流を通して、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から、今年度も引き続きオンラインでの交流を実施し、国内外の教職員延べ 169 名にご参加いただき、日本への受け入れには 13 の教育機関や学校、専門家にご協力いただきました。2 年目を迎えたオンライン交流の新たな形を模索しながら、より深い対話を通した相互理解の推進のため、各国のカウンターパートと協働しながら様々な手法やコンテンツを用いて、事業を推進してまいりました。

本年度の事業の詳細は、本報告書をご参照いただきたく存じますが、変化の激しい社会情勢の中においても、国際交流の重要性を再認識し、課題を見据えながら、よりよい事業に昇華させていくため、ACCU は今後も真摯に取り組んでまいります。

最後に、本事業の実施にあたって多大なるご支援とご協力をいただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

2022 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目 次

事業概要・実績	3
1 韓国との交流	
1 - 1 ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム	5
1 - 2 韓国教職員招へいプログラム	8
2 中国との交流	
2 - 1 中国教職員招へいプログラム (中国とのオンライン交流)	12
3 タイとの交流	
3 - 1 タイ政府日本教職員招へいプログラム	18
3 - 2 タイ教職員招へいプログラム	20
4 インドとの交流	
4 - 1 インド教職員招へいプログラム	24
付録	
プログラム写真	27
令和3年度招へいプログラム協力機関	29
プログラム関連機関	
事業実施・運営機関	

事業概要

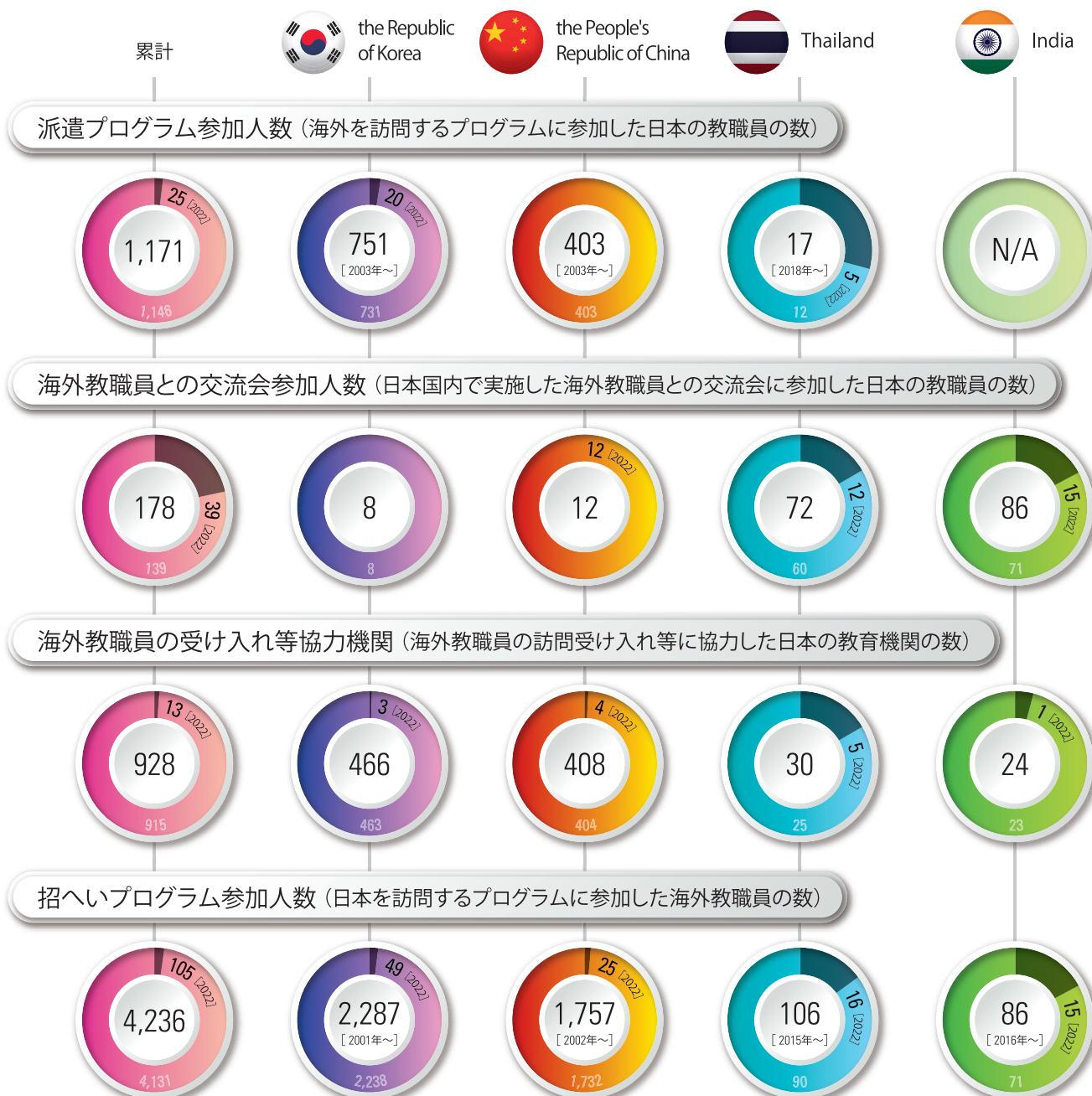
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCUは2001年より、未来を担う子ども達に影響力を有する教職員を対象とした国際交流事業を実施しています。本事業は、教職員同士の交流を通して、お互いの国

の教育制度、教育事情および文化について相互理解を深め、教職員自身が変容していく端緒を開き、ひいては多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目的としています。

令和3年度は文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム」の一環として「初等中等教職員国際交流事業」を実施しました。

事業実績



※ オンライン参加を含む

第1章 韓国との 交流

the Republic
of Korea



上：共同授業 韓国の教室／下：教職員同士の対話

ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム

将来を見据えたブレンド型学習 —— ポストコロナ時代の SDGs の達成に向けて ——

背景

COVID-19 感染拡大予防の観点から今年度のプログラムは昨年同様に 7 月から 10 月にかけてオンラインで開催することとなりました。今年度のプログラムは以下のように 3 段階で構成されています。

- 1) SDGs の地域社会での達成をテーマとし、ブレンド型学習の授業を共同開発する。
- 2) 日韓の教職員が取組結果について、相手国の生徒・児童に対し授業を実施する。
- 3) オンライン交流を通しての学びを共有する。

ブレンド型学習の共同開発の主な目的は、韓国の学校の教育システムやユネスコスクールの活動を、日本の教職員により深く理解してもらうことにあります。今回のプログラムでは、韓国の教職員との長期にわたるコミュニケーションや、上記三つのプログラムでの学びを通して、この目標の達成を目指しています。

活動内容

- 1) オンラインレクチャーや韓国の教職員との交流を通し、ユネスコスクール及び平和と持続可能な開発に関する、現代韓国の教育政策や課題について学ぶ。
- 2) 新型コロナウイルス感染拡大を踏まえつつ、地域社会での SDGs 達成についてのブレンド型学習の実践について議論する。
- 3) 持続可能なまちづくりのための、コロナ禍での学校及びコミュニティにおける地球市民教育と平和教育のあり方を模索する。
- 4) 少人数でのオンライン交流を通し、韓国文化に対する理解を深める。
- 5) ユネスコスクールの SDGs に対する取り組みや地球市民教育、平和教育の考え方をオンラインで共有し、コロナ禍の困難を乗り越える。

目的

- 1) 日本の教職員が、韓国の初等中等教育システムや、教育における課題についての理解を深めること
- 2) 持続可能な開発のための教育（ESD）と 地球市民教育（GCED）についてのユネスコスクールを含む学校及びコミュニティにおける効果的な実践方法を探り、SDGs の実践のためのブレンド型学習の授業を共同開発すること
- 3) 指導経験を共有し、両国の教職員の指導の質を向上させること
- 4) 日韓の教職員のつながりを強化すること



日程

日程	活動内容																
7月17日(土)	<ul style="list-style-type: none">・開会式-【オリエンテーション】: 参加者紹介とグループ分け及びディスカッショントピックについての説明-【文化紹介】日韓の文化の共通点と相違点の理解-【講義】韓国の教育システムやユネスコスクールの活動についての紹介																
	<ul style="list-style-type: none">・グループ間での定期的なオンラインディスカッションとワークショップ <p>両国の教育システムについての情報交換、またSDGsのためのブレンド型学習の改善策の検討が含まれる</p> <table border="1"><thead><tr><th>期間</th><th>活動内容</th></tr></thead><tbody><tr><td>～7月第3週</td><td><ul style="list-style-type: none">・オンライン講義の受講：SDGs及びその他のテーマについて的一般的な理解</td></tr><tr><td>7月第4週</td><td><ul style="list-style-type: none">・第1回グループミーティング：日韓の学校カリキュラムの共有及び理解与えられたテーマの中から、サブテーマの決定</td></tr><tr><td>8月第2週</td><td><ul style="list-style-type: none">・第2回グループミーティング：ブレンド型授業計画の作成</td></tr><tr><td>7月～9月</td><td><ul style="list-style-type: none">・全体ミーティング</td></tr><tr><td>8月28日(土)</td><td><ul style="list-style-type: none">- 地域コミュニティと文化施設の紹介ビデオの共有- 各グループのプロジェクトの共有とフィードバック・第3回グループミーティング：授業計画の作成</td></tr><tr><td>9月第1週</td><td><ul style="list-style-type: none">・第4回グループミーティング：授業計画の作成</td></tr><tr><td>9月</td><td><ul style="list-style-type: none">・モデル授業の実施・第5回グループミーティング：成果の報告、フィードバックの交換及び報告書の提出に向けての準備・報告書の提出（授業内容の成果、会議資料、写真、動画などを含む）</td></tr></tbody></table>	期間	活動内容	～7月第3週	<ul style="list-style-type: none">・オンライン講義の受講：SDGs及びその他のテーマについて的一般的な理解	7月第4週	<ul style="list-style-type: none">・第1回グループミーティング：日韓の学校カリキュラムの共有及び理解与えられたテーマの中から、サブテーマの決定	8月第2週	<ul style="list-style-type: none">・第2回グループミーティング：ブレンド型授業計画の作成	7月～9月	<ul style="list-style-type: none">・全体ミーティング	8月28日(土)	<ul style="list-style-type: none">- 地域コミュニティと文化施設の紹介ビデオの共有- 各グループのプロジェクトの共有とフィードバック・第3回グループミーティング：授業計画の作成	9月第1週	<ul style="list-style-type: none">・第4回グループミーティング：授業計画の作成	9月	<ul style="list-style-type: none">・モデル授業の実施・第5回グループミーティング：成果の報告、フィードバックの交換及び報告書の提出に向けての準備・報告書の提出（授業内容の成果、会議資料、写真、動画などを含む）
期間	活動内容																
～7月第3週	<ul style="list-style-type: none">・オンライン講義の受講：SDGs及びその他のテーマについて的一般的な理解																
7月第4週	<ul style="list-style-type: none">・第1回グループミーティング：日韓の学校カリキュラムの共有及び理解与えられたテーマの中から、サブテーマの決定																
8月第2週	<ul style="list-style-type: none">・第2回グループミーティング：ブレンド型授業計画の作成																
7月～9月	<ul style="list-style-type: none">・全体ミーティング																
8月28日(土)	<ul style="list-style-type: none">- 地域コミュニティと文化施設の紹介ビデオの共有- 各グループのプロジェクトの共有とフィードバック・第3回グループミーティング：授業計画の作成																
9月第1週	<ul style="list-style-type: none">・第4回グループミーティング：授業計画の作成																
9月	<ul style="list-style-type: none">・モデル授業の実施・第5回グループミーティング：成果の報告、フィードバックの交換及び報告書の提出に向けての準備・報告書の提出（授業内容の成果、会議資料、写真、動画などを含む）																
10月16日(土)	<ul style="list-style-type: none">・閉会式- オンラインフォーラム：成果についてのプレゼンテーション（授業改善へのつながり、モデル授業の実施、その他交流について）																

参加資格

- 1) 日本の初等中等教職員および特別支援学校の教職員または教育委員会職員であること。
- 2) 自らの指導経験を韓国の教職員へ伝えようという強い意志があること。
また、自校と韓国のユネスコスクールとの国際交流に関心がある方が望ましい。
- 3) 健康に問題がなく、全ての日程に参加することができること。
- 4) ユネスコスクールの活動、または持続可能な開発のための教育（ESD）及び地球市民教育（GCED）の促進に積極的であること。

参加者数

参加校：9校 参加人数：20名

評価と報告

- 1) 参加者は韓国ユネスコ国内員会によるプログラム評価フォームに記入する。
- 2) 参加者は、グループレポートの作成を行う。レポートの内容としては、グループミーティング、授業、モデル授業の成果などが含まれる。

通訳

上記の予定の間は、日韓通訳が提供される。

参加者リスト

	氏名	地域	所属
1	赤嶺 美奈子	沖縄県	伊江村立伊江中学校
2	金城 絵玲奈	沖縄県	伊江村立伊江中学校
3	大和田 彩	高知県	高知県立室戸高等学校
4	尾知 桃子	高知県	高知県立室戸高等学校
5	公文 理江	高知県	高知県立室戸高等学校
6	安部 裕太朗	新潟県	新潟市立高志中等教育学校
7	外田 有梨	岐阜県	岐阜県立可児高等学校
8	鈴木 未央子	千葉県	八千代市立大和田南小学校
9	辻本 涼	千葉県	八千代市立大和田南小学校
10	村瀬 正	千葉県	八千代市立大和田南小学校

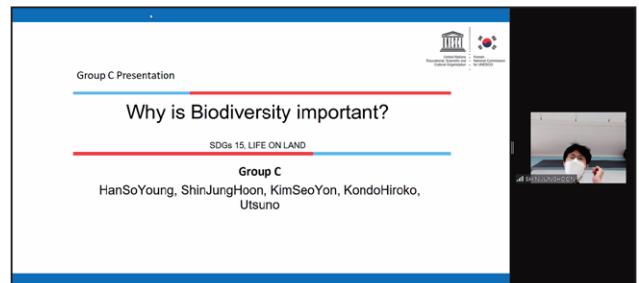
	氏名	地域	所属
11	小西 智子	千葉県	日本体育大学柏高等学校
12	花田 好浩	千葉県	日本体育大学柏高等学校
13	中原 章子	千葉県	千葉県立松戸国際高等学校
14	町田 登志子	千葉県	千葉県立松戸国際高等学校
15	嶋田 拓哉	千葉県	千葉県立松戸国際高等学校
16	近藤 博子	神奈川県	神奈川県立綾瀬西高等学校
17	宇津野 志保	神奈川県	神奈川県立綾瀬西高等学校
18	佐野 純	大阪府	箕面こどもの森学園
19	鍋内 郷子	大阪府	箕面こどもの森学園
20	塚本 有多香	大阪府	箕面こどもの森学園

実施内容

2021年度 ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラムは韓国と日本の参加者によって構成されるグループにおける持続可能な開発のための目標(SDGs)をテーマとした授業の共同開発とオンラインにおける授業実践によって構成されています。参加者は気候変動対策・陸上生態系の保護・平和と公正などのSDGsの目標にちなんだ授業を約3か月に渡ってオンラインにおける協議を重ねて考案しました。そして実際にその授業について参加者の所属校において交流という形で実践を行いました。交流を通じて、参加者は多様な価値観に触れるとともに、オンラインにおける授業実践・交流の新たな可能性に気付き、今後の更なる実践に向けてモチベーションを高めました。

参加者の声

- ・オンライン交流は気軽に参加をすることができ国際交流を実践するまでの垣根が下がったと感じることができたので今後も積極的に活用したい。
- ・今回の交流をきっかけに生徒・教員共にもっと交流したい、知りたいという気持ちが強まり今後の更なる交流を進める上で大きなモチベーションとなった。
- ・パンデミック下で国際交流の機会が途絶えていたため、今回の交流をきっかけにしてオンラインも含めた様々な形での交流の可能性を感じることができたので今後も継続的に実践を行いたい。



韓国教職員招へいプログラム

背景

今年度の韓国教職員招へいプログラムは、COVID-19 感染拡大予防の観点から、昨年度より引き続きオンライン上で交流で実施することになり、2022年1月17日(月)から1月28日(金)までの期間、複数回にわたって韓国の初等中等教育教職員ら約50名と本邦との間で実施しました。なお、昨年度のオンライン実施結果を踏まえ、議論中心かつ小グループでの学校訪問とすることにしました。

活動内容

ウェブ会議システムを活用し、以下の活動を行う。

- 1) 動画視聴による授業視察
- 2) 日本の教育制度についての講義受講
- 3) 日本の教職員との意見交換
- 4) 日本の児童生徒との意見交換

目的

- 1) 教職員同士の交流を通じて、互いの国の教育制度、教育事情および文化について相互理解を深め、教職員自身が変容していく端緒を開く。その変容を通じて多様性への理解と尊重が育まれ多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献することを目指す。
- 2) プログラムの活動を通してより深い交流を行うために参加者が事前に設定したテーマに基づいた交流を行い、日韓の教育に関しての共通の課題を発掘する。プログラム後も両国間の継続した交流のためのネットワークを構築することを目指す。



日程

プログラム／実施日	アクティビティ	詳細
開会式 1月17日(月)	オリエンテーション 日本の教育についての講義	地域・学校紹介は訪問校別に実施
学校訪問 1月18日(火) 1月21日(金) 1月25日(火)	1限目：生徒と交流	日本の生徒との交流（アイスブレイク）
	2限目：生徒と議論	日本の生徒が設定したテーマで議論
	3限目：教職員と議論	日本の教職員が設定したテーマで議論
報告会閉会式 1月28日(金)	報告内容の共有と議論	学校訪問についての報告 授業実践についての議論

参加資格

- 1) 國際理解教育、ESD（持続可能な開発のための教育）、SDGs（持続可能な開発目標）等に高い関心を持つ者。
- 2) プログラム参加中に得た成果をプログラム後に自身の所属先、延いては韓国の教育に還元する姿勢を持つ者。
- 3) プログラム参加中ならびに参加後も積極的に主に教育分野における日本との交流および国際相互理解を深める活動に取り組む姿勢を持つ者。
- 4) 大韓民国の国籍を有すること。
- 5) 所属する学校等からの推薦を受けた、韓国の初等中等教育に携わる教職員である者。（教育行政官及び教育専門家を含む）
- 6) プログラムの全日程に参加が可能であること。
- 7) 過去の日韓教職員交流プログラムに参加した経験のある教職員の参加も可とする。

参加者数

韓國教職員と韓國ユネスコ国内委員会（KNCU）スタッフ並びに韓国の行政官含め 49 名

評価と報告

プログラム終了後各参加者は ACCU の用意するオンライン評価票に速やかに記入し送信する。

通訳

ACCU はプログラム期間中、通訳者（日→韓）を手配する。

参加者リスト

	氏名	所属
1	YEOM SOOKYUNG	The Attatched Elementary School of Gwangju University of Education
2	CHOI SOMANG	Okgwa High School
3	LEE JONG MYUNG	Hapcheon gaya Primary School
4	SHIN JUNGHOO	Changnyeong Daesung High school
5	KIM KARAM	Dongtan Global High School
6	SON EUN JU	Chungnam Foreign Language High School
7	LEE HO YEON	Munsan Sueok High School
8	CHOI WOOSEOK	Chungju Shinheung High school
9	WON JIN SEOP	Dasanhangang Middle School
10	KIM YONGHAN	Woonam High School
11	LEE MYOUNGHWA	Sanfmoon High School
12	KIM KYOUNG HWAN	Peniel Middle of the Arts
13	KWON GA YEON	Gyeseong High School
14	CHOI SUNG-WOO	Bae-jeong High School
15	JEONG YUN HYUK	Jeongsan Middle School
16	KIM INHEE	Seoul National School for the Blind
17	HAN SANG JOON	Jin-Gyeong Girls' High School
18	YOON JIEUN	Taejeon High School
19	JEON HO NAM	Gangwon International Education Institute
20	JIN SUNHO	Eulji Middle School
21	JUNG DAE SUNG	Namhae High School
22	OH KWANGRAE	Sacheon Middle School

	氏名	所属
23	PARK CHANSOO	Saemmaru Elementary School
24	KIM KIL DONG	Seonghwan Elementary School
25	CHOI SOMANG	Poongmoon High School
26	PARK SU HYUN	Samjuk Elementary School
27	KIM IK HYUN	Gyeonggu High School
28	SHIN SUGANG	PungAm Elementary School
29	SON MATTHEW	Suncheon Wangji Elementary School
30	HONG SEONMI	Hanwool High School
31	LEE DEOK JU	Songgok Girls High School
32	JO EUNHEE	Seonhwa Girl's Middle School
33	TAE YOUNGCHUL	Hanwool High School
34	HA HYUNMI	Masan Girls highschool
35	LEE BAL EUM	Dong Won High School
36	OH JI YOU	Goyang Global HighSchool
37	SHIN YUN HEE	Goyang Globel High School
38	SHIN HYE JUNG	High School Attached to College Of Education, Dongguk University
39	KIM SEUNG CHUL	Jeonju Shinheung High School
40	KIM CHEOL KANG	Yeoung Seon School
41	KIM JI YOUNG	Ulsan Science High School
42	LIM YEOJIN	Seoul Munsung Elementary School
43	PARK JUNE SUNG	Hapcheon gaya Primary School
44	LEE HYEIN	Ministry of Education, Republic of Korea

	氏名	所属
45	CHO HANJOO	Seoul Metropolitan Office of Education
46	SHIN JONG BEOM	Korean National Commission for UNESCO
47	LEE SOU YEON	Korean National Commission for UNESCO

	氏名	所属
48	SON DAYEON	Korean National Commission for UNESCO
49	YOON JUNG	Korean National Commission for UNESCO

実施内容

昨年度と同様にオンライン形式での実施となった本プログラムにおいて韓国教職員の参加者は八戸工業大学第二高等学校・附属中学校、栃木県立真岡北陵高等学校、埼玉県立春日部女子高等学校に訪問を行い、受け入れ校の教職員・生徒と交流を行いました。交流の際には「両国の学校生活の違い」「学習への取り組み」「コロナ禍の教育への影響」「ICT 教育」「進路選択」など多様なテーマについて意見交換を行い新たな学びや気づきを得ました。またプログラム終了後の交流に向けて話し合うなど今回のプログラムをきっかけとした将来における継続的な繋がりと更なる活発な交流を予感させました。

また韓国教職員は受け入れ校の日本教職員が実践した実際の授業動画の視聴を事前に行い、1月 28 日（金）の閉会式の際に両国の教員によって構成されたグループに分かれて意見交換を行いました。話し合いのテーマは「参加者自身が教育活動を行う際に重要にしている価値観・考え方」と「本プログラムをどのように今後の教育活動に活かしていくか」に設定されて、様々な視点から自由に語らいました。実際の授業動画を基にして「学習者の主体的な学びを保証すること」や「誰も取り残さないようすること」などの様々な意見が各参加者から活発に出されて互いに共感しあう部分や新たに発見をする部分など多くの気づきがありました。さらには本プログラムの経験を基にして「他の参加者の価値観・考え方を今後の自らの教育活動へ応用したい」、「今回繋がった縁を今後も活用して様々な交流を行っていきたい」などの様々な前向きな意見が出されました。

参加者の声

- ・交流を通じて日本の先生が持つ教育についての考えにおいて共感できる部分が多くありました。今回のプログラムは今後の継続的な交流に向けて良いきっかけになったと思います。引き続き日本の学校との交流を希望しています。
- ・オンラインでの交流には慣れない部分もありましたが、良いプログラムに参加することができて光栄でした。
- ・このプログラムで学んだことを自分の学校の教育活動に応用したり、この経験を自分の学校の同僚と共有したいと思います。



第2章 中国との 交流

the People's
Republic of China



漢字一文字でリフレクション



話は尽きない！先生たちの充実した意見交換

中国教職員招へいプログラム（中国とのオンライン交流）

背景

日本と中国の国際交流事業は、2002年に中国から初等中等教育教職員を招へいし、プログラムが始まりました。2003年からは中国政府による日本教職員の訪中プログラムに発展し、今日にいたるまで相互交流が続けられ、併せて2千人以上の中日教職員が海を渡りました。今年度は、昨年度に引き続きオンラインにより実施し、中国教職員が我が国の教育について学び、日本に対する理解を深めるとともに、日本教職員と交流する機会をつくりました。

- ・参加した教職員が各教育現場で国際理解または国際交流活動を推進していくこと。

「授業研究プログラム」：

さまざまな経験をもつ中国と日本の先生が対話・協働し、相互理解を深めること。

「学校での交流プログラム」：

魅力的な取組みを紹介し、教職員のみならず生徒との交流を通じて日本に対する理解を深めること。

目的

- ・中日教職員が双方の学校教育の現状を把握すること。
- ・中日教職員が日本の学校の特色ある取り組み（教育実践）の好事例を学ぶこと。
- ・中日教職員が意見交換等を通じ交流すること。
- ・プログラムに関わる中日双方の関係者が友好を築き、相互理解の促進、ネットワークを構築すること。

活動内容

ウェブ会議システムを利用して、以下の活動を行う。

- ・日本や中国の教育制度および教育政策についての研修
- ・日本の学校等の取組みに関する視察（映像配信）
- ・教職員や生徒との意見交換や交流
- ・中国教職員による中国の文化等の紹介

日程

A グループ（中国教職員12名）：授業研究プログラム（小学校・中学校）

B グループ（中国教職員13名）：学校での交流プログラム（高等学校）

日程（2022年）	時間	内容
1月12日（水）	13:00 – 16:30 (中国時間) 14:00 – 17:30 (日本時間)	開会セッション【A・B グループ共通】 <ul style="list-style-type: none">・開会（あいさつ） 文部科学省 大臣官房国際課 教育改革調整官 村上尚久 中国教育部 国際協力交流司アジア・アフリカ処 副処長 鄭晗 中国大使館 二等書記官 張瓊瓊 ACCU 国際教育交流部 部長 進藤由美・オリエンテーション・日本の教育等に関する講義（文部科学省） 文部科学省初等中等教育局 初等中等教育企画課 国際企画調整室主任 青山恵津子・中国の教育等に関する講義（中国教育部） 中国教育部 教育発展研究センター総合研究部 副主任 張家勇・質疑応答・みんなで一緒にやってみよう！・グループ交流 <p>※日本教職員、協力校の代表、その他、中国、日本双方の関係者も出席</p>

日程（2022年）	時間	内容
1月 14 日（金）	13:00 – 16:30 (中国時間) 14:00 – 17:30 (日本時間)	授業研究（教育研究）に関する全体会【A グループ】 ・上越地域の授業研究について 小学校編：松井千鶴子先生／中学校編：小林晃彦先生 ・学校での授業研究について 上越教育大学附属小学校の授業研究：倉又圭佑先生／上越教育大学附属中学校の授業研究：岩船尚貴先生 ・授業予告 創造活動「さんさんフィールド」：笠井悠先生／実践国語科「宮澤賢治から社会を読む」：倉又圭佑先生／国語科「令和に生きる未明」：草間啓先生／保健体育科「Technical Catch-Volleyball」：金子秀史先生
1月 15 日（土） ～ 1月 17 日（月）	時間指定なし	授業視聴【A グループ】
1月 18 日（火）	13:00 – 16:30 (中国時間) 14:00 – 17:30 (日本時間)	協議会【A グループ】 ・授業者による授業の振り返り ・協議会（交流会） <ファシリテーター> 創造活動：松井千鶴子先生／実践国語科：松岡博志先生／国語科：岩船尚貴先生／保健体育科：周東和好先生
1月 19 日（水）	12:30 – 14:20 (中国時間) 13:30 – 15:20 (日本時間)	学校での交流【B グループ】 ・Welcome speech：校長 鶴貝秀明先生 ・中国の先生のあいさつ：涉外オフィス主任 黄朝浪先生 ・学校紹介ビデオ（生徒による） ・中国の先生による学校紹介：林浩先生、曾澍芸先生 ・中国の先生の感想：徐子卿先生 ・終わりのことば：西村唯史先生
1月 20 日（木）	8:55 – 10:45, 15:00 – 16:00 (中国時間) 9:55 – 11:45, 16:00 – 17:00 (日本時間)	学校での交流【B グループ】 【中国語】：授業見学、質疑応答 【英語表現】：生徒による PPT 発表、質疑応答 【教職員交流】：日中の先生の交流、薛雪先生のあいさつ
1月 25 日（火）	13:00 – 16:30 (中国時間) 14:00 – 17:30 (日本時間)	振り返り・これからの展望【A・B グループ共通】 ・振り返りとこれからの展望：陶力文先生、笠井悠先生、劉蓉先生、岩船尚貴先生、李敏先生 ・リフレクション ・エキスパートによる総括：釜田聰先生 ・中国教職員代表のあいさつ：丁海霞先生 ・ACCU よりあいさつ：国際教育交流部 部長 進藤由美
1月 28 日（金）		参加者は評価票①を提出
3月 31 日（木）		参加者は評価票②を提出

参加者数

中国教職員 25 名(A グループ:授業研究プログラム 12 名、

B グループ：学校での交流プログラム 13 名)

日本教職員 12 名（授業研究プログラム）

システム（アプリケーション）の操作ができる者（4）

プログラムの全日程に参加が可能である者

【中国の参加者について】

（1）中華人民共和国の国籍を有する者 （2）中華人民共和国の初等中等教育の教職員である者（教育行政官及び教育専門家を含む）

【日本の参加者について】

（1）日本の国籍を有する者 （2）日本の初等中等教育の教職員である者（教育行政官及び教育専門家を含む）

参加資格

【中国・日本側に共通する参加条件】

- （1）初等中等教育に携わり、日本また中国との交流に意欲的な者
- （2）プログラム後も中日の国際交流や国際理解推進に積極的に関わることができる者
- （3）十分なインターネット環境があり、パソコンやウェブ会議

評価と報告

- (1) 参加者は 2022 年 1 月 28 日（金）までに評価票（アンケート票）を提出する。
- (2) 参加者は 2022 年 3 月 31 日（木）までに報告書を提出する。

通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われる。

参加者リスト

<中国の先生（授業研究プログラム）>

	名前	教科	役職	所属先／地域
1	丁海霞	国語	国語教育研究チームリーダー	九江長虹小学校 江西省九江市
2	黄燕	数学	数学教育研究チームリーダー	九江長虹小学校 江西省九江市
3	宗麗麗	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市
4	伍姿	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市
5	潘帆	数学	科学研究センター副主任	九江長虹小学校 江西省九江市
6	陶力文	美術	教育研究チームリーダー	九江長虹小学校 江西省九江市
7	車蓓蓓	英語	涉外オフィス主任	九江外国语学校 江西省九江市
8	易丹霞	英語	教諭	九江外国语学校 江西省九江市
9	李雲雲	英語	教諭	九江外国语学校 江西省九江市
10	吳琪敏	英語	教諭	九江外国语学校 江西省九江市
11	劉蓉	英語	教諭	九江外国语学校 江西省九江市
12	趙文斌	英語	教諭	九江外国语学校 江西省九江市

<中国の先生（学校での交流プログラム）>

13	艾海英	英語	教諭	九江市同文中学校 江西省九江市
14	曹利紅	英語	教諭	九江市同文中学校 江西省九江市
15	曾澍芸	英語	教諭	九江市同文中学校 江西省九江市
16	丁楠	英語	科学研究センター幹事	九江市同文中学校 江西省九江市
17	胡昕婷	英語	教諭	九江市同文中学校 江西省九江市
18	李敏	英語	教諭	九江市同文中学校 江西省九江市
19	林浩	英語	教諭	九江市同文中学校 江西省九江市
20	劉慧敏	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市

	名前	教科	役職	所属先／地域
21	徐子卿	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市
22	薛雪	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市
23	于嘉智	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市
24	肖慧娟	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市
25	馮梅	英語	教諭	九江長虹小学校 江西省九江市

<日本の先生（授業研究プログラム）>

	名前	教科・専門	役職	所属先
1	松井千鶴子	総合的な学習の指導法、 教育課程の編成 カリキュラム・マネジメント	教授	上越教育大学
2	小林晃彦	総合的な学習の時間指導法	特任教授	上越教育大学
3	松岡博志	国語・総合的な学習の時間	副校長	上越教育大学附属小学校
4	笠井悠	国語・総合的な学習の時間	教諭	上越教育大学附属小学校
5	倉又圭佑	国語・総合的な学習の時間	教諭	上越教育大学附属小学校
6	岩船尚貴	国語	教諭	上越教育大学附属中学校
7	草間啓	国語	教諭	上越教育大学附属中学校
8	金子秀史	保健体育	教諭	上越教育大学附属中学校
9	松田芽以		教諭	稻沢市立高御堂小学校
10	周東和好	保健体育科教育特論など	教授	上越教育大学
11	増田有貴	英語	教諭	村上市立荒川中学校
12	藤井美香		教諭	上越市立東本町小学校

<日本の先生（学校での交流プログラム）>

13	西村唯史	コミュニケーション 英語、英語表現	国際キャリアコース長	品川エトワール女子高等学校
----	------	----------------------	------------	---------------

	名前	教科・専門	役職	所属先
14	目次祐子	英語	外国語 科主任	品川エトワール 女子高等学校
15	蔣文明	中国語	専任 講師	品川エトワール 女子高等学校
16	ガルシア・ デニース	英語		品川エトワール 女子高等学校
17	後藤里奈	英語	専任 講師	品川エトワール 女子高等学校
18	世古秀一郎	英語		品川エトワール 女子高等学校
19	仲川京香	英語	専任 講師	品川エトワール 女子高等学校

<エキスパート（アドバイザー）>

釜田聰	国際理解教育、 総合学習	教授	上越教育大学
-----	-----------------	----	--------

実施内容

「授業研究プログラム」では、上越教育大学教授釜田聰氏、上越教育大学附属中学校、上越教育大学附属小学校の協力により、大学教授による上越地域の教育・授業研究・教育の歩みについての講義、4つの授業に関する資料や映像が提供されました。プログラムのハイライトは1月18日に実施された協議会（交流会）でした。授業ごとにグループに分かれ、授業者の先生を含む6-7名で交流がなされました。各グループには授業内容の専門家であるファシリテーターが配置され、中国・日本の教職員からさまざまな意見を引き出し、対話を活性化させてくださいました。参加者は、授業の背景にある研究紀要や活動案・指導案と併せて事前に授業を視聴しています。教科（学習）指導の背景にある理論や教員の捉え、視点が明確に共有されたことにより、教員の児童生徒に対する働きかけ・指導における哲学について、解像度の高い言葉のやりとりがなされました。学校や学校教育を俯瞰的に捉えた視点とは異なり、これまでの交流とは一味違う側面がありました。

「学校での交流プログラム」は、品川エトワール女子高等学校の協力で実現しました。学校紹介では、生徒が制作した映像が流れ、学校の教育課程や日本文化の授業について、生徒が日本語と中国語で説明しました。このビデオは中国の先生に好評で、あらためて視聴したいという声が多くありました。紹介された「マルチメディアコース」を選択する生徒について、もともと素養があるのか、学校の教育で相当のスキルを身につけることができるのかという質問が中国の先生からありました。また、学校での恋愛可否や十代の若者のLGBTQに対する姿勢についてなど、日本の生徒の率直な質問も投げかけられていました。中国の2名の先生による中国の紹介では、事前に寄せられた生徒の「学

校制度」「学び」「学校生活」に関する質問の答えが含まれた発表でした。2日目の夕方には教職員交流が行われ、「日中両国における英語教育の現状と課題」および「日本における女子高の特徴」をテーマが挙げられ、中国の先生から寄せられた質問に答える要素が含まれていました。

最終日（1月25日）には、全体でプログラムでの学びを振り返り、未来に向けた視点も大切にしながら、今後の展望を含む内容を中国と日本併せて代表5名の先生が発表しました。ACCUに対する提言をくださる中国の先生もいらっしゃいました。交流する際、科目を増やし、交流の幅を広げ、ものによっては焦点を絞ること、今回のオンライン交流は日数が短いが、引き続き探求を続け、学んでいきたいと考えており、この交流での学びは参加した教員に長期にわたって影響しつづけると確信しているので、ぜひ交流を発展させてほしいという内容でした。最後には、本プログラムのエキスパート（アドバイザー）として計画段階から助言やお力添えくださった上越教育大学教授釜田聰氏より、総括がなされました。多様なアクターによって創出されたプログラム、新型コロナウィルス感染症が生み出した優れたプログラムであること、そして今後の展望として、①ハイブリッド型の交流の可能性、②日本与中国で共通する課題を切り口にした交流、③授業研究・学校交流としては、同一の学校目標を設定している学校同士の交流、各学校の共通の目標にしほっての交流、研究会が示されました。国際理解教育を専門にした大学の教授の視座からこのプログラムの意義を捉えていただいたことはプログラムとして初めての試みでした。

参加者の声

「このプログラムの中で一番印象的だった活動は何ですか?」という質問に対する中日教職員35名の回答よりランダムに6つ抽出しています。

- ・映像で紹介された、実際の活動案に基づいた教員主導の研究事例が一番印象に残りました。映像からは、児童が学習の主体であること、活動中にすべてのコアスキルを身につけていることがわかります。また、活動を終えた小学1年生の子どもたちの記述を見ると、子どもたちの書く力が強くなっていることがわかりました。
- ・少人数のグループ活動で、自由時間を多く取られ、より深いコミュニケーションを図ることができました。
- ・草間啓先生の授業を視聴し、授業に関する意見交換や日本人の先生との交流が一番印象に残っています。
- ・授業公開をされた先生への質疑応答の場面で、中国の先生方の授業に対する観察眼の鋭さや授業のねらいや工夫の本質を見極める力の高さを実感するとともに、質問を受けることによって公開された授業のこれまで見えなかつた価値に気付いたことです。
- ・中国において、学習内容の基礎・基本を大切にしながらそれを活用し、実生活や実社会で生かされるような主体的な学習活動を積極的に展開されていることが分かったことです。
- ・当校の「体験と学び」「子ども理解の原則」という教育理念に基づいた授業がどのように受け止められるのか不安でしたが、中国の先生方が受容的に活動を受け止め、かつ積極的に授業を通した「子どもの学び」という教育の本質に迫る意見交流がなされました。また、交流中は、自由闊達な意見や質問が交わされて、オンラインでありながらも「近い」距離を感じた充実した時間でした。

以下6つの質問に対する品川エトワール女子高等学校の先生の回答(複数)から、各質問につきランダムに1つ抽出しています。

Q. 今回の中国教職員とのオンライン交流について、全体的なご感想をお書きください。印象に残った具体的な事例や発言内容等についても含めていただければ幸いです。

A. 事前の準備をしっかりしていたので、全体的にズムーズに流れだと思います。中国の先生方が英語の教え方について非常に研究熱心で意欲的であることが良く分かりました。一地方都市の学校にあれだけ優秀な教員がいることは、いまの中国の学校教育のレベルの高さを物語っているのではないかと思いました。

Q. 今回の中国教職員とのオンライン交流によって生徒さんが国際

理解等に関して何か得られたものはありましたか。また、それはどのようなものか具体的におしえてください。

A. 中国の先生方に直接プレゼンテーションができる場を与えられた生徒は緊張しながらもよい経験をいたいたと思います。また、中国の高校生の普段の姿を説明していただき国によって教育の在り方が違うことを理解できました。特に、昼寝の時間があると聞いて生徒は初めは驚いていたようです。実際には昼寝の時間というより午後の自由時間で、その間に昼寝をしてもかまわないということで生徒は納得したようでした。

Q. 今回の中国教職員とのオンライン交流によって先生方や学校が国際理解等に関して何か得られたものはありましたか。また、それはどのようなものか具体的におしえてください。

A. 私自身、中国について知らないことが多く、学びの多い交流となりました。英語教員が大半であったため、英語教育法についてのご質問が多く、英語教育に大変力を入れられていることが印象に残りました。また、学校の規模や生徒数も日本とは比べ物にならないくらい大きく、教員の勤務時間や業務内容についても知りたいと感じました。全体の準備の中で、本校の生徒同士・教員同士の協力支援体制ができ、気づきや成長の多いプログラムでした。

Q. プログラムの企画・運営で、苦労した点や困難だった事についてお書きください。

A. オンラインでの交流だったため通信関係で大変な部分があつたと思いますが、特にありませんでした。

Q. 今後の交流プログラムの内容として、加えると良いと思われる活動がありましたらご提案ください。

A. 今回は教員を中心に交流を行いましたが、せっかく中国の先生方が自分の学校にいらっしゃるので、向こうの授業見学もプログラムに加えていただければ、より双方向的な交流ができたのではないかと思いました。

Q. 今後の教職員交流プログラムの改善に向けてご助言等がございましたら、お書きください。

A. 一度体験させていただいたので、要領がわかり、次につながると思いました。

・どの学校にも言えることだが、英語の教員はこうした交流に興味があるが、それ以外の教員は消極的であるので、学校全体で教職員全体が抵抗なく取り組める企画もあればよいと思いました。(なかなか難しいですね...)

第3章 タイとの 交流

Thailand



互いの国の伝統衣装を身につけた参加者アバターの集合写真



オンライン文化体験でゆかたを着ることに挑戦！

タイ政府日本教職員招へいプログラム

背景

初等中等教育にかかる日タイ間の交流事業は、2015年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、毎年15名のタイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童・生徒との交流を深めてきました。そして、これらの実績が評価され、2017年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受け入れが提案されたことを契機に、2018年から「タイ政府日本教職員招へいプログラム」が開始され、2019年度までに12名の日本教職員がタイを訪問しました。今年度は、COVID-19パンデミックの影響により、タイ教育省およびチュラロンコン大学協力のもと、日タイ合わせて15名の教職員を対象にオンラインで交流プログラムが行われました。

目的

- (1) 日タイ教職員や管理職、教育行政職員が、COVID-19パンデミック下の教育・学習マネジメントにおける成功事例を通じ、知識と経験を高めること。
- (2) 日タイ教職員がつながりを深め、両国の基礎教育段階における連携を強化すること。
- (3) 日本とタイの相互理解を図り、友好関係を強化すること。

活動内容

- (1) 動画視聴・講義を通したタイの教育政策の現状と課題（COVID-19パンデミックへの対応や教育への影響に関する内容を含む）についての研修
- (2) 小グループでの日タイ教職員の交流と意見交換

日程

日付	日程	時間帯（日本時間）	プログラム内容
プログラム期間前		任意の時間帯	講義動画の視聴 ① タイの教育事情（30分） ② COVID-19パンデミック下の教育と学習マネジメントの事例：政策の実用性および児童・生徒への影響との関係の分析（60分）
9月13日（月）	1日目	14:00 – 15:45 (Zoom)	・プログラム開会式 ・自己紹介 ・小グループでの交流、意見交換
		任意の時間帯	タイの事例紹介動画の視聴 ① Chulalongkorn University Demonstration Secondary School（バンコク） ② Vorakaminanusorn School（深南部：パッターニー県）
9月14日（火）	2日目	14:00 – 16:00 (Zoom)	・グループ別意見交換 「事例紹介動画からの学び」
9月15日（水）	3日目	14:00 – 16:00 (Zoom)	・グループ別意見交換 「教育活動における経験の共有」
9月16日（木）	4日目	14:00 – 16:00 (Zoom)	・プレゼンテーション ・小グループ交流、振り返り
9月17日（金）	5日目	14:00 – 15:00 (Zoom)	・振り返り ・授賞式、参加証明書の授与 ・閉会式

参加者数

日本の初等中等教育に携わる教職員最大 10 名を参加者とする。原則として、1 つの学校・機関から 2 名 1 組で参加を申し込み、最大で 5 校計 10 名が参加する。

参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (3) タイとの教育交流に関心を持ち、プログラム期間中の意見交換や交流活動に積極的に参加できること。
- (4) Zoom を利用したオンライン形式でのプログラムに対応可能であること。

実施内容

タイ政府日本教職員招へいプログラムは、2 年ぶりの実施となりました。今回のプログラムでは、主催機関のタイ教育省にタイのチュラロンコン大学が協力する形で実施され、学校現場におけるコロナ対応及びオンライン学習の好事例紹介と、日タイ教職員の意見交換で構成されました。

参加者はタイ側 10 名、日本側 5 名で、最後の 2 日間（9 月 16 日、17 日）に行われた意見交換のパートでは、オンライン授業を含む自宅学習を進めていくにあたっての学校から保護者への発信を題材に、小グループプレゼンテーションを行いました。チームごとに賞も与えられ、パンデミックのさなかでも常によりよい教育を目指し、対話する教職員たちが称えられました。タイの参加者はオンライン授業を積極的に推進する学校の教職員が多く、日本側がその充実ぶりに驚く場面も多くみられましたが、格差の拡大やオンラインツールへの対応など、課題を共有することができました。

評価と報告

参加者はタイ教育省によるプログラム評価フォームに回答する。

通訳

プログラム期間中は、タイ語 ⇔ 日本語の通訳が提供される。

参加者リスト

	氏名	地域	所属
1	山中 幸洋	宮崎県	宮崎県高鍋高等学校
2	持永 明子	宮崎県	宮崎県高鍋高等学校
3	松井 市子	新潟県	新潟県立津南中等教育学校
4	波多野 公恵	新潟県	新潟県立津南中等教育学校
5	熊澤 ほづみ	静岡県	加藤学園暁秀中学校・高等学校

参加者の声

- ・タイの先生の実践から、パンデミックの下で教育活動に従事するために学校が一つのチームになって動いていくと感じました。短期間でシステムを構築し、軌道に乗せることができたのは、先生方の協力としっかりとした組織体制があつてのことだと思います。タイの先生方が子どもたちにとってベストな学習環境を提供し、より良い方法を選択していることを知る素晴らしい機会でした。
- ・少人数の意見交換では、他の先生に頼りすぎている自分自身に気が付きました。自分のイニシアチブ、自分の意見を表現する力を向上させていく必要性を感じました。タイの先生方の優しさは、5 日の間私を大いに助けてくれました。
- ・短い期間ではありましたが、オンラインで有意義な時間を共有することができました。できれば、今後はタイの生徒たちとも交流していきたいです。



タイ教職員招へいプログラム

背景

日本とタイとの間の国際交流事業は、2015年より「タイ教職員招へいプログラム」が文部科学省、タイ王国教育省（MoE）の協力のもとで始まりました。第7回となる今年度は、2022年1月29日（土）から2月7日（月）までの期間、タイの初等中等教育教職員16名（1名の予備参加者を含む）をオンラインで招へいし、交流プログラムを実施しました。

目的

(1) 本プログラムでは、下の活動を通して、教職員が互いの教育制度、教育事情および文化について相互理解を深めるとともに、多様性への理解と尊重を育みます。その学びを参加者が自身の教育活動を通して次世代に伝え、ひいては多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現につなげることを目指します。

(2) 本プログラムには、ゲスト講師および参加者の一部に過去に教職員国際交流プログラムに参加した経験者が加わります。プログラムの参加者同士の「横のつながり」のみならず「縦のつながり」を重視し、持続可能なネットワークの形成とプログラム参加後の教育実践及びその共有の活発化をねらいます。

活動内容

ウェブ会議システムを活用し、以下の活動を行います。

- ・日本の教育制度や関連事項についての講義受講
- ・ACCU およびゲスト講師によるワークショップ
- ・参加者の教育実践におけるアクションプランの作成・共有

日程

日時 (JST)	日程	通信拠点	活動
1月 29 日（土） 15:00 – 17:00	第 1 日	東京都	開会式・全体オリエンテーション 日本の教育事情に関する講義の受講
		教職員国際交流プログラムへの参加経験をもつゲスト講師によるワークショップ・交流（全4回） 「地域、校種、教科をこえてともに考える “Think Globally, Act Locally” の教育実践」	
1月 30 日（日） 15:00 – 18:00			【第1回】岩田 智文 氏 (愛知県江南市立西部中学校理科主任・Microsoft educator expert fellow) キーワード：ウィズコロナ・アフターコロナの地域と連携した理科教育、オンライン理科実験
1月 31 日（月） 15:00 – 18:00	第 2~5 日	東京都	【第2回】金澤 裕司 氏 (北海道地方ESD活動支援センターESDアドバイザー／北海道羅臼高等学校非常勤講師) キーワード：環境教育・自然体験、地方におけるSDGs・ESDを含む実践の共有化
2月 1 日（火） 15:00 – 18:00			【第3回】仲田 郁子 氏 (國學院大學栃木短期大学准教授) キーワード：家庭科教育（生活文化・生活設計）

日時 (JST)	日程	通信拠点	活動
2月2日 (水) 15:00 – 18:00	第2~5日	東京都	【第4回】武田國宏氏 (徳島県上板町立高志小学校前校長) キーワード: 総合的な学習の時間を核にした教科横断的な学び、地域資源の教材化と地域との連携、SDGs、価値変容、行動変容
			アクションプラン作成 (各自)
2月4日 (金) 15:00 – 17:00		東京都	アクションプラン相談会 (自由参加)
2月7日 (月) 15:00 – 17:00	第6日	東京都	アクションプラン共有会 閉会式
2 – 3月			アクションプランの実施および報告

参加者数

(1) タイの初等中等教職員 15名

(うち5名は、2015年から2019年に日本を訪問した参加者とする)

※タイ教育省職員はオブザーバー参加とし、上記の参加者数には含まない

(2) 日本の初等中等教職員の見学者 一日あたり5名以内 (公募による)

参加資格

(1) タイの初等中等教育またはノンフォーマル教育センターの教職員 (教育行政官及び教育専門家を含む) であること

(2) タイ国籍を有すること

(3) 自身でオンライン交流に必要な機材を用意し、操作がされること (パソコンが望ましい)

(4) プログラムの全日程に意欲をもって参加が可能であること

(5) プログラムで作成したアクションプランを実施する教育現場を有すること

(6) 過去に日本を訪問した5名の参加者については、プログラム期間中に自身の経験を新たな参加者と共有し、縦のつながりを強化する意思があること

評価と報告

(1) 参加者は2022年2月20日までにアンケートを提出する。

(2) 参加者は2022年3月6日までにアクションプランの成果を報告する。

通訳

プログラム期間中は、原則として日本語⇒タイ語の逐次通訳が手配されます。日本語の動画にはタイ語字幕がつけられます。

参加者リスト

	氏名	地域	所属
1	Sataporn Butsai	Rayong	Rayongwittayakom School
2	Aswanee Mathawee	Narathiwat	Narathiwat School
3	Apinya Todee	Nakhon Phanom	Nakhonphanom Wittayakom school
4	Krittin Tipmontiane	Surat Thani	Suratthani School
5	Parttana Wiriyathamjaroen	Nakhon Phanom	Phrapathom Wittayalai School
6	Natvara Dondee	Lampang	Bunyawatwittayalai School
7	Wipawan Thitpradit	Bangkok	Phratumnukhsankulab School
8	Nanthana Phosu	Nakhon Phanom	Saharajrangsarid School
9	Jirattiporn Sanguansuttigul	Lop Buri	Pibulwitthayalai School
10	Nattakan Kamnoedsin	Trat	Banklongpratun School

	氏名	地域	所属
11	Atchima Chaiyachit	Samut Prakan	Watsaothongnok School
12*	Pakanapat Jaroensook	Phayao	Anubanchiangkham School
13*	Rujinan Pongna	Ubon ratchatani	Nakrasangsuksa School

*12~16 番は過去に本プログラムで来日した経験のある参加者

	氏名	地域	所属
14*	Chayuth Lohkam	Ubon ratchatani	Benchama Maharat School
15*	Thapanee Wongsawas	Surat Thani	Muang Suratthani School
16*	Prasai Jhetson	Ratburana	Bangpakok Wittayakom School

実施内容

今年度で7回目となる本プログラムでは、タイの教職員16名（1名はパンデミックによる欠員を防ぐための予備参加者）をオンラインで招へいしました。

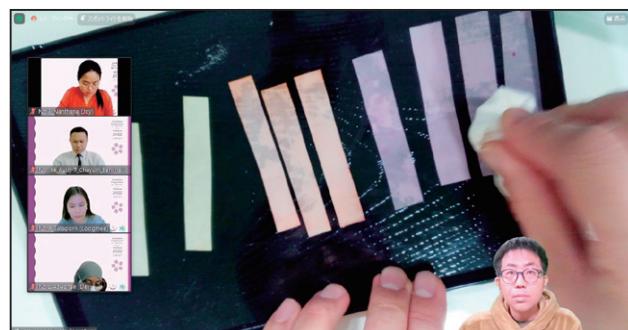
1月29日にオリエンテーションを実施し、文部科学省による日本の初等中等教育についての講義を受講後、1月30日から2月2日にかけて、日本各地の4名の教職員によるワークショップを実施し、その学びを今後の教育実践にどう生かしていくかという内容を参加者それぞれが「アクションプラン」としてまとめ、2月7日のアクションプラン共有会・閉会式で発表しました。

今回のプログラムでは、訪問団（参加者）同士の横つながりだけでなく、参加年度を超えた縦のつながりを作ること、国際交流プログラムに参加した経験をその後の教育実践にどのように生かしていくかといった部分での学び合いの機会をつくることを目的とし、タイの参加者のうち5名は過去に本プログラムに参加した経験がある教職員とし、日本側のゲスト講師も、全員が教職員国際交流プログラム（派遣・招へい・交流会）に参加または協力した経験のある方にご参加いただきました。ワークショップの中では、ゲスト講師が過去に訪日した参加者に「当時の経験を経て教育実践がどう変わったか？」と問いかける場面もあり、今回初めて本プログラムに参加したタイ教職員にも刺激になったようでした。

また、オンラインプログラムの中でできる「体験」を検討し、ワークショップの使用教材を事前に参加者に送付して、画面越しに実験や文化を体験するなどの新たな試みも行いました。実際に日本から届いた教材を手にしたタイ教職員は、参加前から期待が膨らんだと話しており、今後のオンラインプログラムにおける新しい可能性を感じることができました。

参加者の声

- ・プログラム中のすべての活動によって、コミュニティをベースとした教育行動においてアクティブラーニングとESDがどのように活用されているのかが見える化されました。
- ・ワークショップは多様で、非常に興味深いものでした。すべての教材が整えられていて（タイに送られてきて）、プログラム運営側の気持ちが伝わりました。
- ・過去に参加した経験のある教員とともに参加することで、プログラムの雰囲気がよりリラックスしたものになったと思います。経験のある先生方にはプログラムに参加するうえでの有益なアドバイスをいただくこともできました。



第4章 インドとの 交流

India



上：横浜市立東高等学校にて教職員交流
下：それぞれの教育実践を共有

インド教職員招へいプログラム

背景

日本とインドとの間の国際交流事業としては、2016年より「インド教職員招へいプログラム」が文部科学省、インド連邦政府教育省（MoE）、インド環境教育センター（CEE）の協力のもとで始まりました。第6回となる今年度は、2021年12月12（日）から19日（日）までの期間、複数回にわたってインドの初等中等教育教職員15名と、日本側の受け入れ校および公募により集まった15名の日本の初等中等教育に携わる教職員を交えて、オンライン交流を実施しました。

目的

（1）本プログラムの目的は、未来を担う子どもたちを育む教職員同士の交流を通して、日印の教育制度、教育事情および文化について相互理解を深め、教職員自身が主体的なチェンジメーカーとして変容していく端緒を開くことです。プログラム活動を通して、多様性への理解と尊重を育み、それを次世代へ受け継ぐことを通じて、多

様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指します。

（2）インド教職員招へいプログラムにおいては、専門家の協力を仰ぎ、プログラムの評価およびフォローアップを実施し、令和2年度に実施した「国際交流事業 成果可視化委員会」における事業成果分析、評価をさらに深めることを目指します。

活動内容

ウェブ会議システムを活用し、以下の活動を行います。

- ・動画視聴による学校視察
- ・日本およびインドの教育制度や関連事項についての講義受講
- ・日印教職員間の意見交換
- ・日本の児童生徒とインド教職員との交流

日程

日付	時間帯（日本時間）	通信拠点	活動
12月12日（日）	14:00 – 17:00	東京都	<ul style="list-style-type: none">・開会式・プログラムオリエンテーション・日本およびインドの教育制度および関連事項に関する講義（イベント）文化活動（映画観賞会）
12月14日（火）	14:00 – 16:00	神奈川県	<ul style="list-style-type: none">・映像による学校訪問、地域紹介・インド教職員と横浜市立東高等学校の教職員の意見交換会
12月15日（水）	14:00 – 16:00	神奈川県	<ul style="list-style-type: none">・インド教職員と横浜市立東高等学校の生徒との交流会
12月17日（金）	17:00 – 19:00	東京都 (ACCU)	<ul style="list-style-type: none">・グループセッション（日印教職員の意見交換会）
12月18日（土）	14:00 – 17:00	東京都 (ACCU)	<ul style="list-style-type: none">・グループセッション（日印教職員の意見交換会）
12月19日（日）	14:00 – 17:00	東京都	<ul style="list-style-type: none">・報告会・閉会式（イベント）日印音楽鑑賞会
2022年 3月9日（水）	18:00 – 19:30	東京都 (ACCU)	<ul style="list-style-type: none">・フォローアップ交流会

参加資格

- (1) 日本語または英語での会話が可能であること
(2) 自身でオンライン交流に必要な機材を用意し、操作ができること（パソコンが望ましい）
(3) プログラムの全日程に意欲をもって参加が可能であること
(4) 将来にわたって、国際交流を通じた相互理解の推進、平和で持続可能な社会の実現に寄与する意欲があること
＜インド側参加者に限る＞
(1) インドの初等中等教育またはノンフォーマル教育センターの教職員（教育行政官及び教育専門家を含む）であること
(2) インド国籍を有すること
＜日本側参加者に限る＞
(1) 日本の初等中等教育の教職員（教育行政官及び教育専門家を含む）であること
(2) 日本国籍を有すること

参加者数

インドの初等中等教職員 15 名（MoE 職員および CEE の職員 1～2 名を除く）
日本の初等中等教職員 15 名

評価と報告

参加者は、終了直後に実施するアンケート票を提出します。フォローアップミーティングへの参加を依頼する場合があります。

通訳

日本語の動画には英語字幕がつけられます。
意見交換会および交流会は原則として日本語と英語間の逐次通訳が手配されます。

参加者リスト

	氏名	地域	所属
1	Meenakshi Sharma	Delhi	Little Flowers Public Senior Secondary School
2	Yogesh Kumar	Shimla	Jawahar Navodaya Vidyalaya Theog
3	Kishor Borse	Pune	Shri Vamanrao Oturkar Madhyamik Vidyalaya
4	Punam Rajage	Pune	Kai. Sadashiv Urf Bapusaheb Darekar, Pune Municipal Corporation School no. 174 - B
5	Chittaranjandas Devulkar	South Goa	Vivekanand Vidyalaya
6	Lata Naik	Porvorim	Vidya Prabodhini Higher Secondary School
7	Sreevalli Chavali	Hyderabad	Delhi Public School, Nadergul
8	Nazy Stacey Leeks	Thane	Universal High School
9	Sangeeta Choudhury	Surat	Gajera Global School
10	Archana Panicker	Ahmedabad	Planet Discovery Centre
11	Sangeeta Joshi	Haridwar	Delhi Public School, Ranipur
12	Anita Vishwakarma	Pilibhit	Primary School Saidpur, Block-Maror

	氏名	地域	所属
13	Amrita Chaturvedi	Sitapur	Swarachna School
14	Shalini Samnotra	Jammu	Heritage School
15	Mayuresh Kanahiya	West Champaran	Ram Krishna Vikeyanand Vidya Mandir
16	山口 三依子	千葉県	千葉市立加曾利中学校
17	高橋 勝也	愛知県	名古屋経済大学
18	星加 浩平	福岡県	北九州市立菅生中学校
19	赤木 綾香	鳥取県	鳥取県立米子東高等学校
20	川島 彰允	ケニア・ナイロビ	ナイロビ日本人学校
21	伊藤 英夫	東京都	荒川区立第三峡田小学校
22	松原 久	京都府	京都府立北稜高等学校
23	太田 進	東京都	東京都立山崎高等学校
24	鈴木 未央子	千葉県	八千代市立大和田南小学校
25	三村 悠美子	岡山県	岡山大学教育学部附属中学校
26	小川 亮	福岡県	北九州市立菅生中学校
27	徳永 裕介	長野県	長野市立吉田小学校
28	廣井 真理子	愛知県	春日井市立西部中学校
29	奥田 麻衣子	愛知県	瀬戸 SOLAN 小学校
30	平澤 香織	神奈川県	横浜市立東高等学校

実施内容

第6回目となる今回のプログラムでは、インド全土より初等中等教育に携わる教職員15名が参加しました。受入校の横浜市立東高等学校での教職員、生徒との交流に加えて、公募により集まった15名の日本各地の教職員との小グループ（3～4名）でのグループセッションを設け、じっくり交流を深める時間を確保するとともに、本プログラム内では初めて、日本の教職員がインドの教育を学ぶ機会を創出しました。開会式では、文部科学省による日本の初等中等教育概要に関する講義だけでなく、インド環境教育センター（CEE）によるインドの初等中等学校教育制度概要に関する講義も実施しました。「持続可能な開発のための教育（ESD）」においても重視される「ホリスティックな学び」をプログラム構成の柱として位置づけ、教育実践、教育制度に関する交流だけでなく、自由学園 成田喜一郎教授による「ライフヒストリーデザイン曼荼羅」を使った、日印教職員間での個々のライフヒストリーの共有、芸術鑑賞（映画、音楽）を取り入れた包括的なプログラムをデザインしました。プログラム終了後、インド教職員は自主的にミーティングを開催し、それぞれのアクションプランを共有して、今後のさらなる交流へ向けて動き出しています。

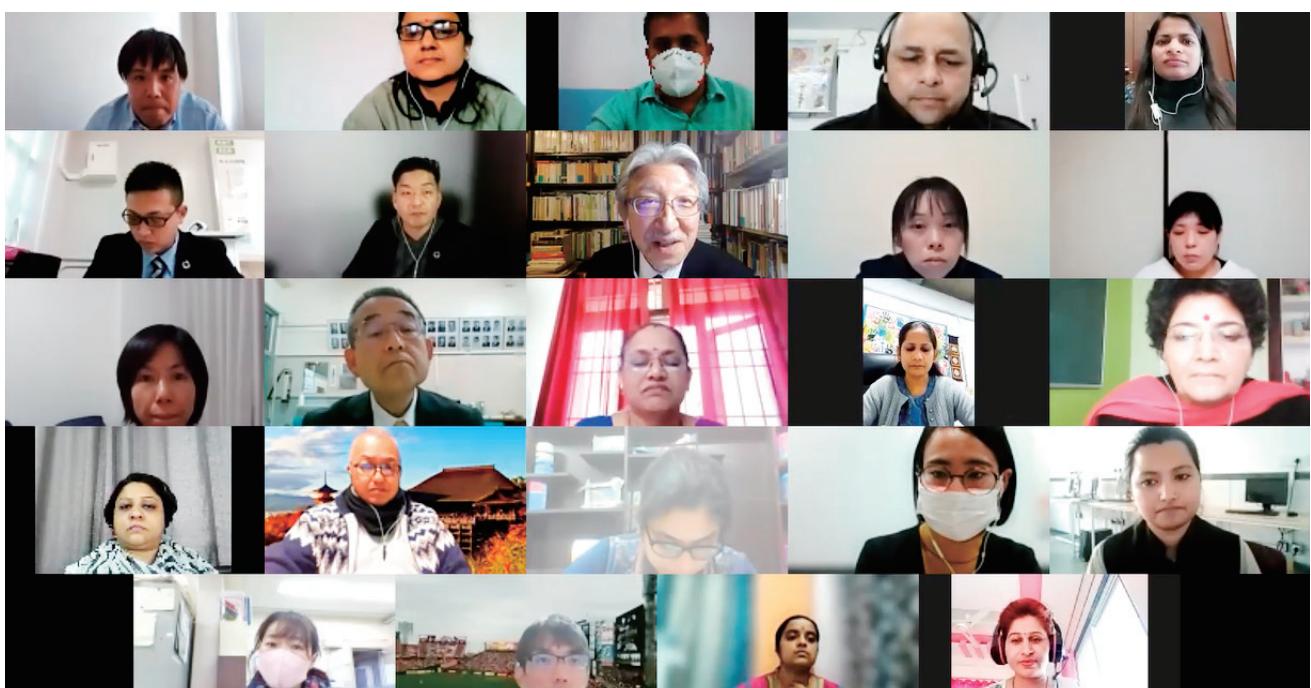
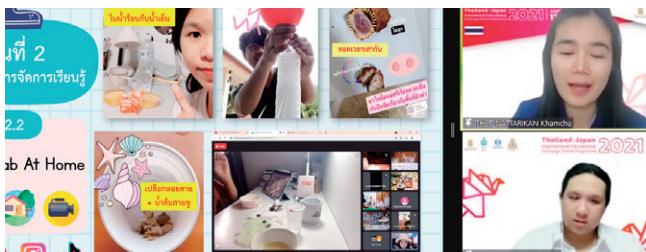


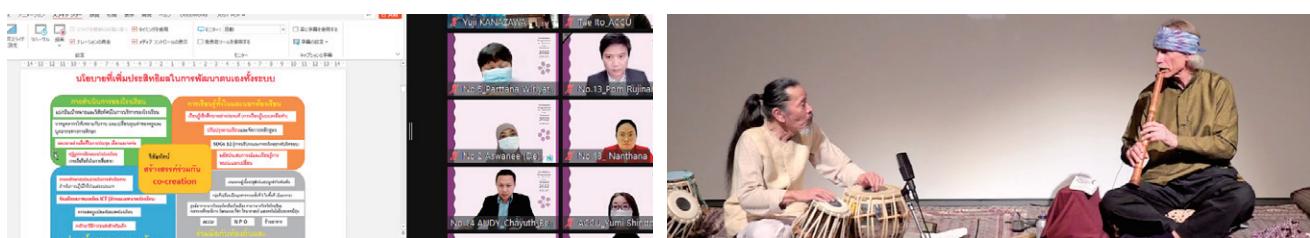
参加者の声

- ・私にとって充実した経験でした。日本の先生や生徒と交流することで多くのことを学び、私たちは同じ船に乗っているのだと実感しました。（インド）
- ・現代の重要なテーマについて教師が議論する国際的な舞台というコンセプトが気に入りました。地球の子どもたちの未来のために話し合うことは、今必要なことだと思います。（インド）
- ・多くの教師のための交流プログラムは、教授法に関するものですが、このプログラムは、自分の内外の学びを深める最高の交流となりました。（インド）
- ・インドの先生と意見を交わす経験が初めてで、とても楽しかったです。（日本）
- ・インドの教育についてたくさん話ができ、日本の教育についても伝えることができました。（日本）
- ・限られた時間ではありましたが、国籍の異なる先生とディスカッションすることはこれまでなかったので、大変良い刺激になりました。これからもこのような教員間の交流も続けていきたいです。ありがとうございました。（日本）



2021 プログラム写真





令和3年度招へいプログラム協力機関

●韓国教職員招へいプログラム

八戸工業大学第二高等学校・附属中学校

校長 明石 進

栃木県立真岡北陵高等学校

校長 藤野 康之

埼玉県立春日部女子高等学校

校長 吉岡 靖久

●中国教職員招へいプログラム

国立大学法人上越教育大学

学長 林 泰成

教授 釜田 聰

国立大学法人上越教育大学附属小学校

校長 清水 雅之

国立大学法人上越教育大学附属中学校

校長 桐生 徹

学校法人藤華学院 品川エトワール女子高等学校

校長鶴貝 秀明

●タイ教職員招へいプログラム

愛知県江南市立西部中学校

理科主任 岩田 智文（ゲスト講師）

蒲郡市生命の海科学館

館長 山中 敦子（岩田氏と連携）

北海道地方 ESD 活動支援センター ESD アドバイザー／

北海道羅臼高等学校非常勤講師

金澤 裕司（ゲスト講師）

國學院大學栃木短期大学

准教授 仲田 郁子（ゲスト講師）

徳島県上板町立高志小学校

前校長 武田 國宏（ゲスト講師）

●インド教職員招へいプログラム

横浜市立東高等学校

校長 藤本 貴也

プログラム関連機関

●文部科学省

文部科学省大臣官房国際課

課長 小林 万里子

文部科学省 大臣官房国際課 国際戦略企画室

室長補佐 松永 佳子

文部科学省 大臣官房国際課 国際戦略企画室

企画調査係長 小野 康平

文部科学省 大臣官房国際課 国際戦略企画室

企画調査係 橋本 聖奈

●海外パートナー機関

・韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）

・中国教育部

・中国教育国際交流協会

・タイ教育省

・インド教育省

・国際NGO インド環境教育センター（CEE）

事業実施運営機関

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F

Tel: 03-5577-2853 Fax: 03-5577-2854

Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL: <https://www.accu.or.jp>

理事長 田村 哲夫

国際教育交流部長 進藤 由美

国際教育交流部主任 高松 彩乃

国際教育交流部プログラムスペシャリスト 伊藤 妙恵

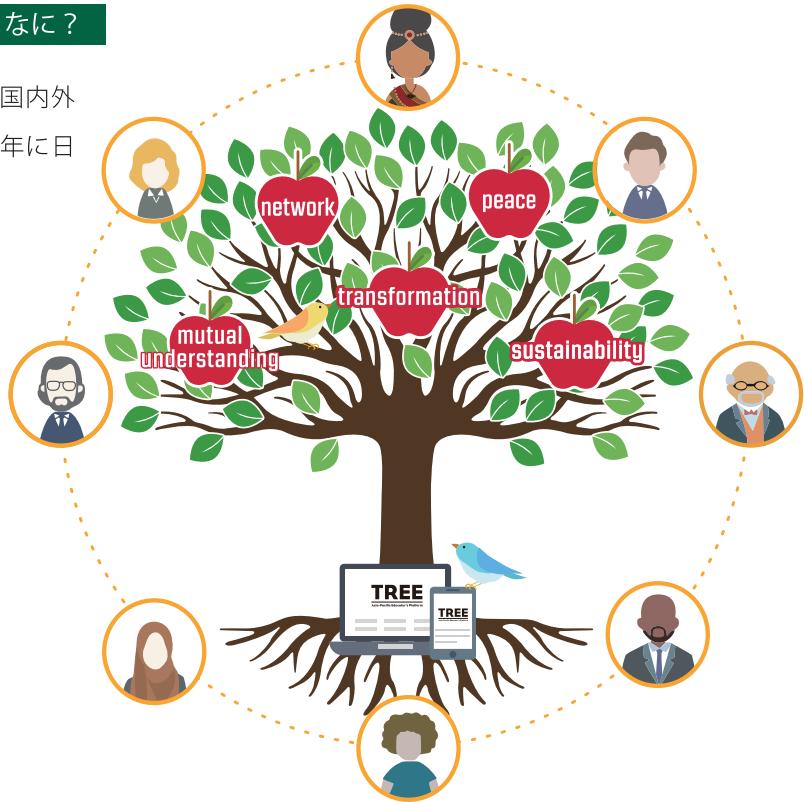
国際教育交流部プログラムオフィサー 天満 実嘉

国際教育交流部プログラムオフィサー 杉戸 卓磨

"Asia-Pacific Educators' Platform: TREE" って、なに？

TREE は、教職員国際交流事業に参加・協力した国内外の教職員がつながるための会員制 SNS で、2020 年に日本語版・英語版の本格運用がスタートしました。

Transformative learning (変容する学び)、
Respect for diversity (多様性への理解と寛容性)、
Exploration (探究)、
Exchanges (交流) の頭文字をとって TREE と名づけられました。



TREE に参加する

- ① 会員登録の申請を行う
こちらから会員登録ページに
つながります ▶▶▶▶▶▶
(PC・スマートフォンどちらも可)



- ② 管理者による本人確認 (3 営業日以内)
- ③ 登録完了メールを受信

教職員国際交流の手引き 第二弾

「TREE of International Exchange 先生たちのための国際交流のとびら」

本事業の成果と参加者の声を現場の方々の手に届きやすい形でまとめ、ACCU ウェブサイトで公開しています。プログラムに参加したことのある方も、ない方も、国際交流の場そのものや、そこに集まってきた先生方の声を感じて、「自分も参加してみたい」と思っていただけたなら幸いです。

- (第 1 章) 教職員国際交流にようこと・・・国際交流の「場」の紹介
- (第 2 章) プログラム参加者の声・・・先生方の声を聴くインタビュー
- (第 3 章) 教職員国際交流トピックス 2021–2022



文部科学省委託 令和 3 年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業実施報告書

2022 年 3 月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <https://www.accu.or.jp>

デザイン・印刷・製本

design service 株式会社

© 2022 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター



Anniversary of Japan's
accession to UNESCO



Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO



MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN